ウィーン魂歌う 命の限り

◇国立歌劇場で日本人初の専属、歌手生活50年◇

白石敬子

ウィーン国立歌劇場と言えば、オペラ歌手の誰しも一度は舞台に立ってみたいと思う憧れの場所だ。1976年、私は日本人で初めての同歌劇場専属歌手となった。このようなキャリアを積めたことは私にとって幸運であり、誇りでもある。

♪ ♪ ♪

年間286回も鑑賞

歌手デビュー50年を迎えたのを機に、私とウィーンのかかわりについて振り返ってみたい。

オペラ歌手に憧れ、武蔵野音楽大学で声楽を専攻した。本場のウィーンでオペラを学びたいと考え、69年、単身ウィーンに。身元引受人のクリスティアンとレネのネベハイご夫妻は地元の有名な美術商で、私はすぐに彼らに溶け込んだ。当初英語もドイツ語もあまり話せなかったが、ご夫妻のおかげでウィーン音楽大学の日々を過ごせた。

歌劇場の他、ウィーン楽友協会での公演にも出演（前列左端、1979年）

大学ではオペラとリート（ドイツ歌曲）に関する厳しい修練の日々が続いたが、夜の公演鑑賞が最も大きな勉強の場だ。当時の歌劇場は1列（14円ほど）あれば立ち見席で鑑賞できた。1年間の歌劇場のオペラ・バレエ上演300回のうち、286回見たこともある。

1年の予定だった留学が2年に延びることが決まったころ、友人を介して日本人学生に出会った。彼の名前は白石隆生。ピアノの勉強のためにウィーンに留学していた。私たちはすぐに仲良くなり、歌手と伴奏者として一緒にオーディションを受けるようになった。

♪ ♪ ♪

国際コンクール入賞

71年に隆生と結婚すると人生は好転した。私は74年にミュンヘン国際コンクールなど3つのコンクールで入賞。隆生もウィーン・フォルクスオーパーの専属副指揮者に決まった。翌年には、ウィーン国立歌劇場が新人を募っていた。世界の頂点に君臨する歌劇場が新人を募るのは珍しい。オーディションに望み、合格を果たした時は本当にうれしかった。

76年から始まった歌劇場専属歌手の生活は甘くなかった。予定は厳しく制限され、自分が出演しない日でも出演者のキャンセルに備えて午後2時までは連絡がつく場所にいなければならない。リハーサルなしでプッチーニ「ジャンニ・スキッキ」の主役ラウレッタを代役で歌ったこともある。

今年亡くなった名テノールのニコライ・ゲッダらとの交流は素晴らしい思い出で、オーストリア人テノールのヴォルフガング・ファスラーら優れた同僚も多数いた。周囲は当初「日本人に何ができるのか」という目で見ていたが、それなりに歌える歌手だと分かると優しくしてくれた。

最も印象的なのがソプラノのビルギット・ニルソンだ。80年に歌劇場の来日公演で共演し親しくなった。ウィーンで仕事した時、いい歌手の秘訣を尋ねると「後で公演の休憩時間に来なさい」。

訪ねると、その日の演目とは別のモーツァルトのアリアを練習中だった。練習の邪魔になると思い引き返したが、後に「これが彼女の言いたいことか」と合点した。モーツァルトの曲は全オペラの基本だという無言のメッセージだった。

ウィーン楽友協会での歌曲公演にも出演できるなど歌劇場は素晴らしい環境だったが、身動きが取れず、日本の家族も心配になった。82年に歌劇場を辞めて独立。プラハ国立歌劇場など欧州の歌劇場にも出演した。その後もウィーン歌劇場には数回出演し、関係者との交流は続いた。

♪ ♪ ♪

大腸がん、17回も手術

日本では地元・神奈川県藤沢市の「藤沢市民オペラ」など活動は順調だったが、2004年に大腸がんが見つかった。がんはかなりの速度で進行。手術をしないと命の保証はないといわれ、早期の手術に踏み切った。

オペラを全編歌う体力はなくなり、06年に藤沢市民オペラで上演した「魔笛」を最後に引退したが、歌手活動は続けている。17回の手術を経験し、15年には夫に先立たれたが、70歳を過ぎた今も何とかやっている。これもウィーンで鍛えられた不屈の精神のおかげだ。

歌手生活50周年の節目として、私の人生をまとめたCDブック（カメラータ・トウキョウ）を刊行した。10月21日には東京・紀尾井ホールでリサイタルを開く。これからも感謝の気持ちを届けたい。その一心で歌い続けていく。（しらいし・ひろこ＝ソプラノ歌手）

掲載日 2017年7月13日 日本経済新聞 朝刊 36ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。